

# 日本の現代書籍におけるウクライナと韓国に 対するステレオタイプ

シャベールニク・カテリーナ(ウクライナ)

## 1. 研究の背景と目的

現代社会では、多文化共生や多文化共存という概念が様々な形で現れており、ますます身近に感じられるようになっていく。昔のように近隣の国や地域だけでなく、遠く離れている国々の人や文化との交流のチャンスが増え、互いに影響し合う存在になっている。しかし、良好な関係を築こうとしている中で、妨げになるものも増えてしまっていることも否めない。その代表的な例の一つが、ステレオタイプ及び固定概念である。

ステレオタイプというのは、一般的に、様々な手段を通して固定された潜在的なイメージだと定義されることが多く、昔から人間の本質であると考えられてきた。本来は、ネガティブな意味だけでなくポジティブな意味もサービス概念であり、中立的な心理学の定義として捉えることも可能であるが、実際には根拠の伴わないステレオタイプも多く存在するため、主観的になってしまうことも起こりうる。様々な言語の辞書に掲載されているステレオタイプの定義も、それぞれその言葉における様々な特徴をはっきりと表している。

1. ありふれたやり方。きまりきった型。特に、心理学で人間の行動・思考・性格などが型にはまって一様であるさま。（精選版 日本国語大辞典<sup>1)</sup>
2. a set idea that people have about what someone or something is like, especially an idea that is wrong (Cambridge Oxford Dictionary<sup>2)</sup>)
3. something conforming to a fixed or general pattern especially: a standardized mental picture that is held in common by members of a group and that represents an oversimplified opinion, prejudiced attitude, or uncritical judgment (Merriam-Webster<sup>3)</sup>)
4. Те, що часто повторюється, стало звичайним, загальноприйнятим і чого дотримуються, що наслідують у своїй діяльності (訳：よく繰り返されていて、日常茶飯事になった考え、従える基本となるもの)（ウクライナ語外来語辞典<sup>4)</sup>

<sup>1</sup> <https://bit.ly/3BNqILl>（以下、脚注1～4はすべて2022年8月9日最終アクセス）

<sup>2</sup> <https://dictionary.cambridge.org/dictionary/english/stereotype>

<sup>3</sup> <https://www.merriam-webster.com/dictionary/stereotype>

<sup>4</sup> <https://www.jnsm.com.ua/cgi-bin/u/book/sis.pl?Qry=%F1%F2%E5%F0%E5%EE%F2%E8%EF>

上記の複数の定義から、ステレオタイプそのものは非常に複雑で定義しにくい言葉であり、意味も可変的であることが考えられる。本研究で用いる「ステレオタイプ」とは中立的なものであるということを基本義として、場合によって「ネガティブなステレオタイプ」や「ポジティブなステレオタイプ」のように分けて用いることとする。

他分野と同様に、異文化コミュニケーションにもステレオタイプが多く存在している。未知の文化に接する場合は利便性が高く、相手のことをあまり知らなくても、ステレオタイプのおかげで、その国と少しだけ面識があると考えることが可能になる。しかしながら、ステレオタイプだけを頼りにしてしまうと、相手の性格や文化、礼儀、価値観などに対してネガティブなイメージを作って、偏見につながってしまうこともある。このため、コミュニケーション自体がお互いを知り合おうとする試みではなく、ステレオタイプ化されたイメージの確認のようなものになる恐れがある。筆者自身も、遠く離れているアジア圏の国の出身者と接したとき、ウクライナのイメージは単純で断片的なもので、「美人の多い国」としてしか知られていないことに気づいた経験がある。このような経験から、国の距離やステレオタイプの複雑さの関係に関心を持つようになった。

本研究は、日本と地理的近接効果の影響が大きい韓国と、国同士の付き合いが比較的短いウクライナの2か国を対象にして、日本の現代書籍に現れているステレオタイプを整理して分析を試みる。このことによって、日本の書籍に現れているそれぞれの国のイメージはどのようなものか、また、そのようなイメージはどのように生まれたのかを明らかにし、異文化交流の場面で見られるステレオタイプの意義や危険性について考察することを目指す。

キーワード：ステレオタイプ、固定概念、ウクライナ、韓国、現代書籍

## 2. 先行研究

村田（2006）は、海外や外国人に対するステレオタイプがどのように生まれ、メディアの影響でどのように変わっていくかを分析している。例えば、自分で直接他国の人に出会わなくても、そのイメージやステレオタイプを作ることも可能であることが述べられている。ステレオタイプや偏見の関連性も説明しており、「外から来た者」への反感や軽蔑の主な原因も具体的に分析している。村田（2006）で特に注目すべきは、外国人のステレオタイプとオリンピックの関係を結びつけている点である。オリンピックという国際レベルのイベントは、既存のステレオタイプの深化、もしくは変更に関わり得るということが述べられている。二次元構造や二次元モデルを例として、1992年、1996年、2000年のオリンピック大会の調査やステレオタイプの変更も説明している。そして、国別に分けて、全体的な外国人のステレオタイプを考察している点も特徴である。

Hilton（2017）は、心理学の観点からステレオタイプの構造を捉え、カルチャーの影響や環境の重要性について論じている。一つの国だけにこだわらずに、文化や国そのものがどの

ようにステレオタイプを構造しているのかを主なテーマとして、“culture in mind”という現象を説明している。人間は誰もステレオタイプを持っていることを前提として、SNS やメディアなどさまざまな手段がステレオタイプ構造で重要な役割を果たしていると主張している。

Hilton (2017) と異なる角度からの研究として、田辺 (2018) は、韓国のみ注目して、2009 年から 2013 年におけるステレオタイプの変化を具体的に分析している。また、ネガティブなステレオタイプが生んでしまう排外主義の要因や、主な特徴も説明している。もともとは表には見えない偏見や嫌がらせがネット上に現れるようになり、社会的な問題や世論調査などがいかに一般人の意見に影響を及ぼしているかを示している。

法務省 (2017) の「外国人住民調査報告書―訂正版―」は、日本在住の外国人住民を対象として、日本人との付き合いや住みにくさの原因・差別の影響などを調査している。日本での生きやすさ、または打ち込みやすさを基準にして、アンケート形式で外国人住民の悩みや困っていることについて質問をし、その原因や改善点などを調査している。この法務省の調査と類似のものとして、安達 (2008) は地方都市を対象とし、外国人への態度やステレオタイプを調査して、その対策方法の提案を試みている。以上、法務省 (2017) と安達 (2008) の両方の調査から考えられるのは、日常的なレベルの知らないものへの恐怖や不信感、良好なコミュニケーションの妨げとなり、お互いの文化や価値観、習慣などを共有する試みを無効にしてしまうということである。回答者の多くは、日常生活で外国人と接触する機会が少ないため、断片的な知識や自身のステレオタイプに頼るしかないという状況も考えられる。しかし、ステレオタイプそのものが不完全なものであるため、ある国から来た外国人に対して「危ない」「無礼」など、良くないイメージのみと結びつけてしまう恐れもある。

Спроба подолання соціокультурних стереотипів у процесі міжкультурної комунікації (邦訳：異文化コミュニケーションと社会的・文化的なステレオタイプの克服) (2018) の中にも、ステレオタイプからの脱出方法や、文化交流をより円滑にするために必要なことなどが述べられている。特に重視されているのは、言語学習における母語話者のイメージである。外国語を学ばば学ぶほど、気付かないうちに母語話者の文化に対するステレオタイプや間違った考え方を持つようになり、そのようなステレオタイプがどのようにコミュニケーションに影響を与えているのかが論じられている。

一方、McCracken (2021) は、アメリカを対象にしたケーススタディであり、ステレオタイプによる不信感や劣等感の例を具体的に挙げている。実例を元にアラブ圏の学生に対するステレオタイプを分析して、帰国する理由や感情の変化、自信損失などについて論じ、海外在住者や社会という問題に焦点を当てている。

### 3. 研究方法

本研究では、研究方法として、テキストの細かい部分に注意を払い、言葉の意味をしっかりと分析する言説分析（discourse analysis）を用いた。言説分析は、言語学や社会学を元にして発言の意味を中心とするアプローチである。言説分析は、言葉を一つ一つ別々に分析するのではなく全体的に分析する方法であり、テキストそのものについて深く理解でき、ニュアンスを読み取れるとされている。本研究の主な目的は、言語化されたステレオタイプのイメージを全体的に分析することであるため、言説分析は最適なアプローチであると考えられる。また、本研究は、一つ一つのステレオタイプに質的に丁寧に分析するのではなく、その影響やそれぞれの国が持っているイメージを広い意味で捉えることを重視するため、用法や言葉選び、感情的なニュアンスなどに注意して、その原因について詳細に論じることができるように、言説分析の基準が必要不可欠であると考えた。

### 4. 研究仮説

歴史上、葛藤や交流が長い韓国に対してのステレオタイプは、複雑で、ポジティブな面よりネガティブな面が強調されてしまうと考えられる。一方、ウクライナについては、歴史上まだ未熟な関係であることから、単純で、断片的なものであって、ポジティブな面しか見えてこないことが多い。そのため、真逆のように見えるが、実際には過度にポジティブなものも、過度にネガティブなものも、真実からは遠い。なぜなら、その国の特徴全体に光を当てず、一つのことに注目が集まると、コミュニケーションも一方的になってしまう恐れがあるからである。現代のグローバル化時代で、それぞれ個人一人一人の性格、背景や立場を考慮し、ありのまま受け入れることで、国際関係や個人での交流が豊かになると考えられる。

### 5. 日本の書籍に現れるウクライナに関するステレオタイプ

国立国会図書館のリサーチ・ナビ<sup>5</sup>の検索結果によると、「ウクライナ」という言葉と一番よく使われているキーワードおよび分野は、「地球学」（ヨーロッパ、ユーラシア、プレートテクトニクスなど）、「国際関係」（国際法、国際組織、安全保証、軍事法など）、「政治」（共和国）であり、文化的な側面はほとんど見られなかった<sup>6</sup>。このことから、ウクライナについては、政治的な面については知られているあるいは関心が寄せられているとしても、文化や言語、習慣などが紹介されることは少ないのではないかということが明らかになった。このことから、ウクライナについての世界観や価値観が日本人にとってはあまり

---

<sup>5</sup> <https://mavi.ndl.go.jp/> （2022年8月9日最終アクセス）

<sup>6</sup> <https://bit.ly/3Q9GvDa> （2022年8月9日最終アクセス）

馴染みのないものであり、初対面で話す時などにステレオタイプをもってしまうことが考えられる。

一方、現代日本語書き言葉均衡コーパスの「少納言」<sup>7</sup>で検索した結果を見てみると、国際関係に該当できる項目が多く見られた。

表 1 ウクライナに関するキーワード（合計 243 件）

国際関係	150
政治	53
文化	5
その他	35

以下、「少納言」で検索した例文の一部を示す。下線は筆者によるものである。

例 1：イタリア首都＝ローマ旅のアドバイスーエトナ山付近では火山活動の状態を確認すること。ウクライナ首都＝キエフ旅のアドバイスー通常はビザが必要。身分証明書を常時携帯すること。

例 2：ハンガリー、アルバニア、ルーマニア、ブルガリア、エストニア、ラトヴィア、リトアニア、ウクライナ、ベラルーシ、モルドヴァ、チェッコ、スロヴァキア（資料）  
日本銀行 国際収支統計

例 3：ウクライナ、タイ、パキスタンなど、政治の動きから目を離せない。

以上例 1～例 3 からは、ウクライナを一つの国としてではなく、他の国や地域と関連付けて紹介していることがうかがえる。これは、一般の日本人にとってウクライナという国自体についてはあまり知られていないという仮説を証明していると考えられる。

一方、以下の例 4～例 7 からは、ウクライナをスラブの国の一部として認識していることがうかがえる。これらの例のなかでは、「旧ソ連」や「チェルノブイリ原発」など、歴史的な出来事についての情報についても触れられている。

例 4：例えば、ソ連の専門家は西欧全域とほぼ同じ広さの地域を測定しなくてはならなかった。ウクライナ、白ロシア両共和国の人口では、農村住民がかなりの割合を占め、伝統的に農地に依存し…（以下、省略）

<sup>7</sup> <https://shonagon.ninjal.ac.jp/>（2022 年 8 月 9 日最終アクセス）

例 5：旧ソ連の崩壊に伴い、ロシア以外に三つの旧ソ連共和国（ベラルーシ、カザフスタン及びウクライナ）にも戦略核兵器が存在することとなった。

例 6：ウクライナの北部にあるチェルノブイリ四号原子炉が夜半すぎ爆発、大気圏に放射性同位元素を吹き…（以下、省略）

例 7：ウクライナのチェルノブイリ発電所の事故を契機に、オーストリアでは、完成したまま使われずに…（以下、省略）

しかし、その一方で、文化や言語、現代の歴史や風習を紹介することはほとんどなく、昔のウクライナの情報はあっても、現代のウクライナ像を作り出すことは難しいのではないかと考えられる。「少納言」で検索・閲覧可能データは、20 世紀末もしくは 21 世紀始めの投稿が比較的多かったため、必ずしも現代の状態をはっきり確認できるわけではない。そのため、特に 21 世紀初頭以降、つまり 2000 年から 2021 年の間に書かれた現代書籍に掲載されている現代のウクライナについてのステレオタイプについても分析する必要があると考えられる。

例を挙げると、北岡（2019）は、ウクライナについて「肥沃な文化大国」や「たくましい国」として記述しており、文学やオペラなど文化的な側面にも注目している。また、北岡（2019）はソ連崩壊後に生じた緊張関係や継続的な紛争という問題も取り上げており、オリガルヒ<sup>8</sup>など国内的なことにも触れている。日本やウクライナの関係は、今後の関係にとっても特に重要であると思われる。第一に、日本は「支援する」側の役に当てられて、お互いの社会的あるいは経済的な付き合いがやや偏っていることを示している。だが、北岡（2019）では、全体的にウクライナを独立している国として記述している傾向が見られる。また、黒川（2002）も、ウクライナを中心にしてヨーロッパの一部であると主張している。タイトルも「ヨーロッパ最後の大国」となっており、歴史的な過程が書かれつつ、結局はソ連との関係ではなくヨーロッパとの繋がりが主要な部分となっている。

数多（2021）も、ウクライナを舞台にした諜報サスペンスの形式を取りながら、旧ソ連だけでなく他の国とも交流を描写している。数多（2021）はフィクション作品（小説）ではあるものの、クリミア問題などがしっかりと取り上げられている点は興味深い。また、小説であるがゆえに、国際関係論などの専門家に限らず、幅広い範囲の読者も触れることが可能であるため、一般の日本人が距離的に遠いウクライナに馴染みを持つきっかけにもなり得るだろう。同様に、佐藤（2010）も、フィクションでありながら、ロシア革命がもたらしたウクライナ人の悲劇を描写している。主人公について、たくましさ、純粋さや造形深さを語りな

---

<sup>8</sup> ロシアやウクライナ等旧ソ連諸国の資本主義化（主に国有企業の民営化）の過程で形成された政治的影響力を有する新興財閥（Wikipedia より）。<https://bit.ly/3BNwpU5>（2022 年 8 月 9 日最終アクセス）



がら、「ロシア人」としてではなく「ロシアの支配下になってしまったウクライナ人」として描写している。そのような主人公のイメージが、極めてポジティブでわざと共感できるように書かれているということも、ステレオタイプに当てはまる可能性が高いが、お互いの国が持つ関係にいい意味で影響することも考えられる。

その一方で、多くの書籍では、ウクライナについてはっきりとした独立国というイメージがないことも見られる。手嶋・佐藤（2014）は、ウクライナを「忘れられてしまう国家」と名付け、ロシアと結びつけて分析している。クリミア問題やオレンジ革命など、比較的話題性のあった問題を描写しつつ、未だに「ロシアのくびき」から脱する必要があると述べている。先述した北岡（2019）でも同じような傾向が見られ、ウクライナが旧ソ連と関連付けで描写されている。馬淵（2014）や菅沼・藤井（2015）も、いわゆるウクライナ危機<sup>9</sup>に関する問題で警鐘を鳴らしながらも、政治的な関係や近代史に注目を当てている。

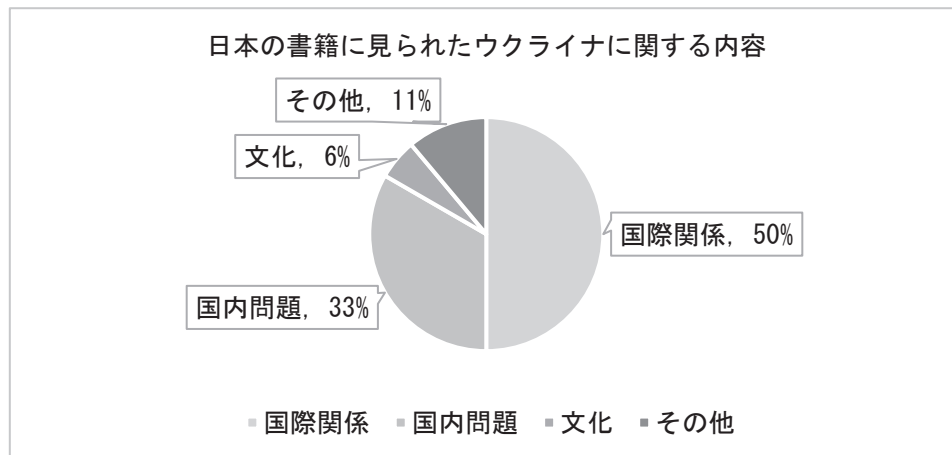
そのような国のイメージは、国際関係論の場面では非常に重要な役割を果たしていることは否めないが、それと同時に、ウクライナの住民や風習、文化などがほぼ無視されており、「問題を抱えている国」というイメージにつながってしまう可能性もある。「政治的な面については広く言及されていても文化的な側面への注目が足りない」という状態は、ウクライナを一つの国としてではなく、「ウクライナ+ロシア」「ウクライナ+旧ソ連」「ウクライナ+他の国」というパターンの書き方が多いことに起因すると考えられ、その結果、一般の日本人がウクライナそのものに馴染みを持つことが難しくなってしまうことも考えられる。

手嶋（2021）の『鳴かずにカッコー』の中では、「ウクライナの気高い精神と多民文化」を描写するだけでなく、同時に、貧富の差など国内の社会的な問題も指摘して、他の作品と比較してより複雑なイメージを形成している。手嶋（2021）は、感情的にならず、誇らしい点や醜い点を論じており、単純化されたステレオタイプから離れてより平等な立場からウクライナを取り上げている。

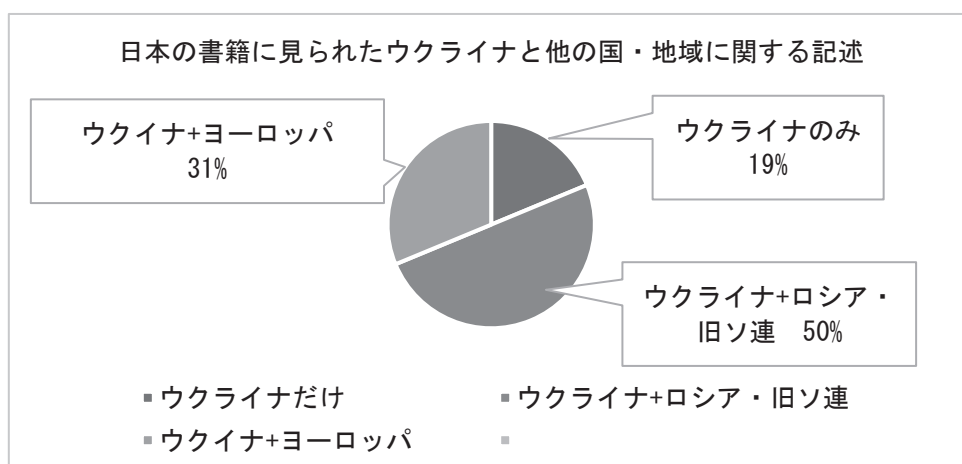
以上、日本の書籍のなかで描かれているウクライナのイメージについて、筆者が調べることができた範囲のものを示した。そしてその中には、類似点や共通点も見られた。特に多かったのは、国際関係論に関連しているテーマであり、ウクライナを一つの国としてではなく、ヨーロッパの一部、もしくは旧ソ連・スラブ国の一部として捉えた記述であった。以下、ここまで述べてきた内容をグラフ1とグラフ2で示す。

---

<sup>9</sup> ウクライナにおける政治的・軍事的危機のことで、具体的には2003年からはじまるオレンジ革命、さらに2013年11月からのユーロ・マイダン革命からの国内政治の不安定化、そしてロシアが介入した2014年クリミア危機からロシアによるクリミアの併合以降の衝突、および、こうしたウクライナ情勢をめぐる欧米社会とロシアの対立などを指す（Wikipediaより）。なお、馬淵（2014）や菅沼・藤井（2015）の内容には、2021年以降のロシア連邦軍の侵攻について含まれていない。 <https://bit.ly/3QtMh2e> （2022年8月9日最終アクセス）



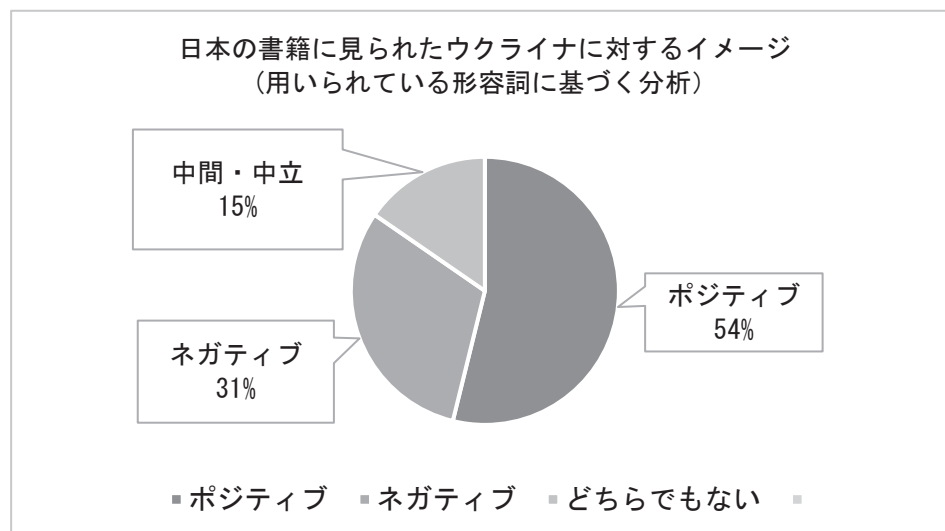
グラフ1 日本の書籍に見られたウクライナに関する内容の分類



グラフ2 日本の書籍に見られたウクライナと他の国・地域の組み合わせの分類

加えて、それぞれの筆者が使用している形容詞・国の描写を分類した。その結果、約半数（約 54%）がウクライナに対するポジティブなイメージであった。具体的には、「土地の豊かさ」、「人口のたくましさ」、チェルノブイリ原発事故後で行われていた「困難に耐えられる取り組み」が中心であった。一方、特にオリガルヒなど国内問題を取り上げている書籍の中には、ネガティブなイメージも一定数見られた（約 31%）





グラフ3 日本の書籍に見られたウクライナに対するイメージ

以上、これまで述べてきたことから、日本の書籍の中では、ウクライナに対してはポジティブな記述が多かったが、国際関係や政治的な面、ある程度の国内問題などが一般の日本人に知られるようになって、文化的な側面やウクライナ語という独特の言語については、まだまだ論じられることが少ないのではないかという仮説が示唆された。また、ウクライナが独立国となってから約 30 年しか経っていないため（2022 年 8 月時点）、旧ソ連の国々との区別がつかないように取り上げられることも少なくないことも明らかになった。現在のウクライナについて述べている書籍の中でも、「独立したウクライナ」のイメージではなく、「ヨーロッパ圏の一部であるウクライナ」として記述しているものが多く見られた。

## 6. 日本の書籍に現れる韓国に関するステレオタイプ

5 章では、日本の書籍の中に現れているウクライナに対するイメージについての分析を示した。本章では、韓国についての分析を示す。ウクライナについての分析と同様、「韓国」というキーワードを国立国会図書館のリサーチ・ナビで検索した結果、「ウクライナ」を検索した際に見られた「国際関係」や「政治学」だけでなく、「科学」（原子力、エネルギー、技術など）や「歴史」関連する言葉が見られた<sup>10</sup>。また、リサーチ・ナビ内の百科事典のページにも政治的なキーワード（「社会党」など）だけでなく、韓国史や科学高校など、文化や現代社会に関係のある言葉も見られた。

しかし、ウクライナと同様に政治学に該当する言葉は見られたが、少納言で検索した結果、「ウクライナ」と比べると「韓国」ということばの方が使われる頻度が高いことが明らかになった。ウクライナの場合は 243 件であったのに対して、韓国の検索の結果は 8998 件であ

<sup>10</sup> <https://bit.ly/3vR9Aeq> （2022 年 8 月 9 日最終アクセス）

った。その要因としては、地理的に近い韓国はさまざまな書籍や資料で言及されることが多いこと、日本との歴史的な関係が長く、その結果や政治や社会面でのつながりも深いことが考えられる。よって、「韓国」というキーワードが使用される分野も、第5章で示したウクライナに関する分類で用いた「国際関係」「政治」「文化」という基準を用いるだけでは不十分であることが考えられるため、より詳細な基準を設ける必要があると考えた。そこで、8998件のうち、文脈が不明な場合や日記の形で筆者の個人的な体験談が論じられている場合を除いた6961例について、以下の表2のように分類した。

表2 韓国に関するキーワード（合計6961件）

国際関係	5500
政治	1243
文化	115
歴史	41
経済	37
料理	25

第5章で述べたように、ウクライナの場合、料理や経済、歴史に関する書籍が少なかったが、日本と距離的に近く歴史的・文化的な関わりも深い韓国は、上記表2で示したようにさまざまな面が記述されていた。また、ウクライナは、ヨーロッパ圏の他の国々や旧ソ連の国々と一緒に紹介されることが多かったということを述べたが、韓国の場合、アジア圏の国々と一緒に取り上げる例が見られた（例8、9）。

例8：韓国、タイ、インドネシア、フィリピン、香港、日本などのアジア各国の料理と酒を出す。

例9：韓国は、中国共産党に頼りすぎている。

また、日本や韓国をただ論じるだけでなく、両国を対立する立場とするパターンも見られる（例10）。距離的に近い国であることから「日本と韓国」という比較は抵抗なく考えられても、「日本とウクライナ」の比較は考えにくいだろう。

例10：日本の中小企業は多くの問題を抱えている。韓国の中小企業も厳しい事情は同じだ。

興味深いのは、そのような比較は政治学や国際関係だけにとどまらず、教育制度や言語、映像学などでも頻繁に見られたことである。ウクライナの場合は、このような例に該当する例が5件しかなかったため、区別せずそのような項目も「文化」として大まかにまとめることが可能であるが、韓国の場合、より複雑で細かい分類が必要となる。

それだけでなく、「韓国」というキーワードを用いてブログなどの形で自分自身の体験を語る例も数多く見られたが（例 11）、ウクライナの場合、「実際にウクライナを訪れた」という投稿は、筆者が調べた限り見られなかった。日本と韓国については、全体的に、両国の繋がりを強調しているパターンもあって、現在までの関係や共通の歴史の影響が推測される。

例 11：日本各地で韓国人旅行団を見かけるようになった。韓国語を学ぶ日本人、日本語を学ぶ韓国人も増え、相互の留学も増加している。

日本と韓国のように距離的に近い国同士の場合、歴史を通してお互いの国のことを深く知ることが比較的容易であるため、様々な分野で取り上げられるようになり、国に対するイメージも具体化・複雑化していったことが示された。一方、第5章で示した日本とウクライナのように距離的に遠い国同士の場合は、お互いの国について具体的に深く知ることが困難になりやすいため、お互いの国へのイメージが抽象化・単純化され、紹介される分野も一部のものとなり、知られていない部分も残りやすいと考えられる。

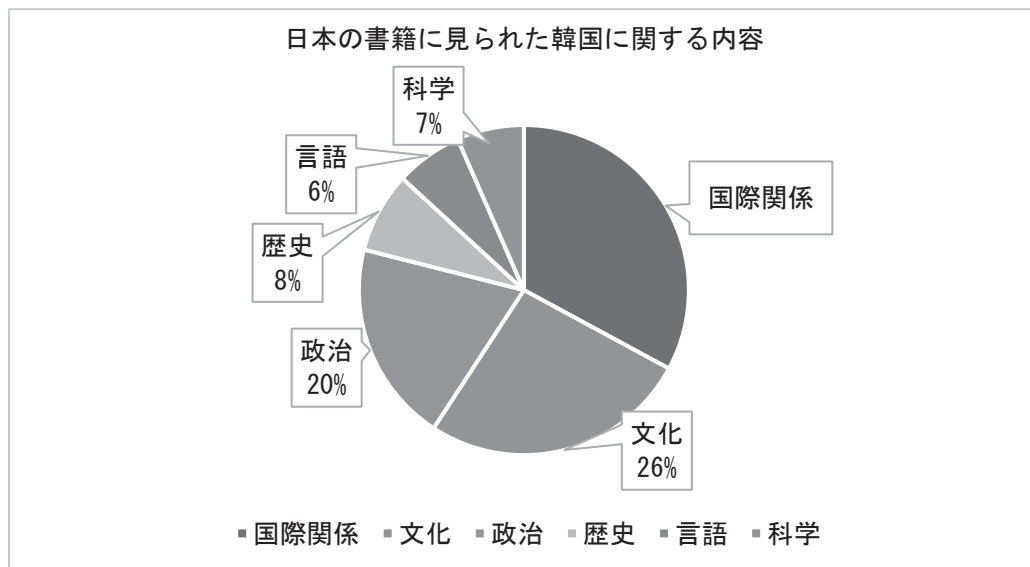
しかしながら、お互いの国のことを知っているからこそ、歴史的な葛藤や問題が生じることもあるだろう。そしてそれらは、書籍の中にも表れ、時には書籍のタイトルにも立場や意見がはっきりと表れることもある。例えば、金田（2018）の『差別された韓国で気づいたふるさと日本』や、室谷（2017）の『韓国リスク 半島危機に日本を襲う隣の現実』は、タイトルに既にネガティブなイメージが表れている例であると言えるだろう。

また、書籍の本文の中にも批判的・非難的な捉え方が表れている例もある。室谷（2014）は、実際に起こった沈没船の事故を分析し、韓国国内に見られる「無責任」に注目している。ウクライナの場合と異なり、ある程度の文化的な側面も紹介されているが、国の葛藤や日本との対立を強調している。同様に、金田（2018）も、日本と韓国の両国を対立的に捉えており、第5章で示したウクライナの例では見られなかった「日本との関係」という話題が分析され、具体的に描写されている。さらに、国際関係の本だけでなく、木村（2022）のような体験談を基にした著書でも、日本と韓国の文化やライフスタイルの違いが紹介されている。また、小倉（2021）のように、「韓国の実像がまだ知られていない」と強調したうえで、様々なレベルで韓国での個人的な体験について示している著書も見られる。このように、韓国の場合、距離的な近さを生かして実際に韓国に滞在し、そこで見聞きした内容に基づいた著書

数多く見られるが、ウクライナの場合、同様の内容の著書は少ないと考えられる。だが、そのように韓国での体験を基にした著書でも、「日本との壁」や「ネガティブな側面」に注目が向けられることが一般的なようである。特に、いくつかの書籍の中で紹介されていた韓国の「パリパリ」という考え方に対して、否定的な意味で「結果よりスピードを重視する」といったように解釈されているようである。

それに対して、室谷（2017）は、ウクライナの場合と結びつけられる内容も見られた。例えば、国内問題を論じる際に同じ「危機」という単語が用いられていた。さらに、その「危機」をもたらしているのは、現代の政治のあり方にあると述べられている。このように、著者や国が違うにもかかわらず、日本の観点から共通している点も見られる。

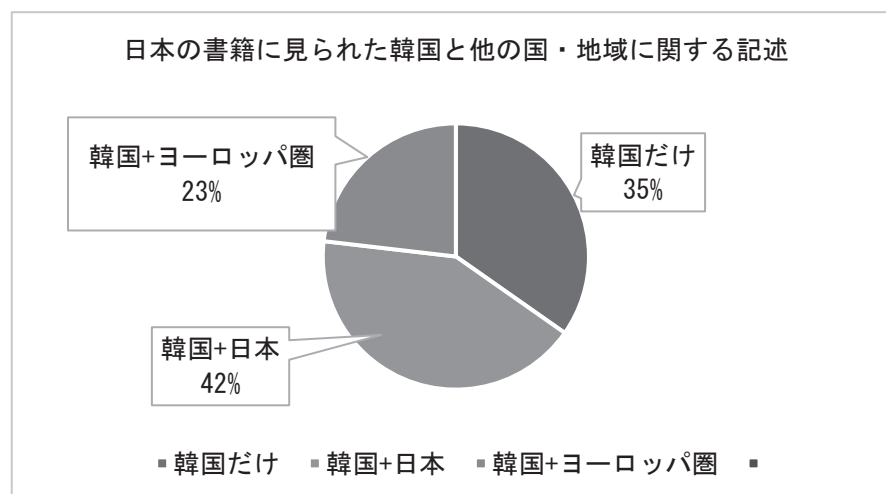
もう一つの区別できるパターンは、韓国をアジア圏の一部として捉えていることである。たとえば、渡辺（1999）、治部（2021）、造事務所（2021）などは、複数の国の文化を比較することで、それぞれの国の特徴をとりあげている。これらの例からは、少納言の検索で見られた「アジアの一部の韓国」のイメージが強調され、韓国を身近に捉えていることが理解できる。その証拠の一つとなるのは、韓国の文化や言語、習慣や考え方が具体的に書かれていることである。ウクライナの場合、ほとんどの場合で政治的な側面のみが紹介されているのに対して、韓国の場合、多岐にわたる分野が注目されている（グラフ3）。



グラフ4 日本書籍に見られた韓国に関する内容の分類

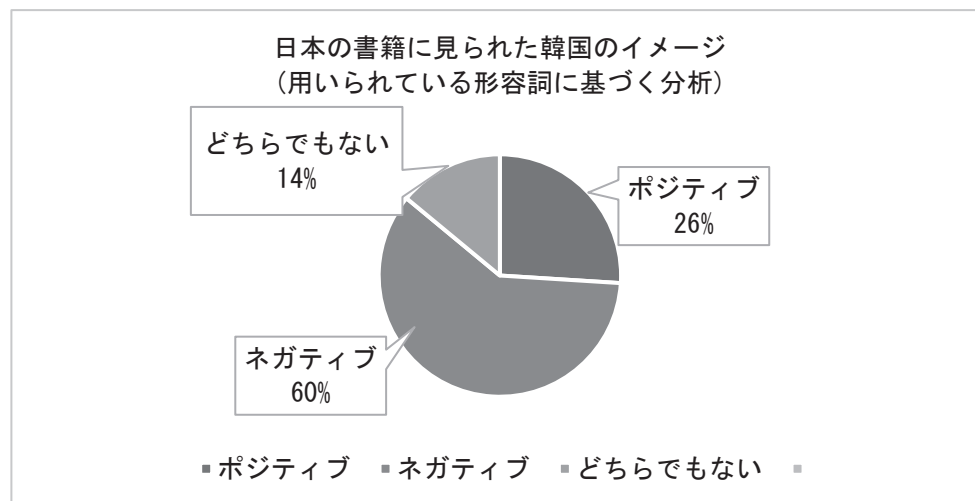
グラフ1で示したように、ウクライナは日本との馴染みがまだ薄いことから、日本の書籍で現れているテーマも限られていたのに対して、韓国の場合、グラフ3で示したように、多岐にわたる内容について言及されていた。

また、グラフ 4 で示したように、「韓国だけ」を紹介している場合がウクライナよりも多く見られた。第 5 章で、グラフ 2 で示したように、「ウクライナだけ」を論じていた例は 19%であったのに対して、「韓国だけ」を論じていた例は 35%であった。この結果は、日本におけるそれぞれの国との付き合いや認識度と関連していると考えられるだろう。加えて、ウクライナでは見られなかった「+日本」という、日本との関係やこれからの交流、これまでの歴史的な特徴を表している例も見られた。



グラフ 5 日本の書籍に見られたウクライナと他の国・地域の組み合わせの分類

一方で、韓国は日本との関係がウクライナより長く、知られている分野が多いにもかかわらず、グラフ 6 で示したように、全体的な国のイメージはややネガティブとなっていることが明らかになった（60%）。特に「無責任な」や「いい加減」などのような形容詞が頻繁に用いられており、そのような描写を通して、これまでの韓国との関係や日本との比較を述べたうえで、日本の文化や社会の良い点を強調するパターンも見られた。



グラフ6 日本の書籍に見られた韓国に対するイメージ

このような分析の結果、日本における韓国のイメージはウクライナより複雑であり、歴史的な付き合いを鮮明に表していることが明らかとなった。しかし、同時に距離的に近い国同士の場合は、必ずしもお互いをポジティブに捉えているとは限らないことも示唆された。

## 7. 結果のまとめと考察

本研究では、日本から距離的に近い韓国と遠いウクライナについて、コーパスや現代書籍などを使って比較した結果、それらに現れているそれぞれの国のイメージがかなり異なっていることが明らかとなった。まず、距離的に遠いウクライナについては、文化的な側面が紹介されていない、もしくは、全体的ではなく一部分のみ紹介する書籍が多く見られた。また、全体的な国のイメージがややポジティブであることも明らかになった。一方、日本と距離的に近い韓国の場合、様々な分野が紹介されているが、それらは日本との比較を通して紹介されていることが多いことが明らかとなった。加えて、国のイメージをネガティブに捉えてやや批判的に論じている例も多く見られた。しかし、「韓国と日本」というテーマに注目を向ける書籍があったのに対して、「ウクライナと日本」の交流の試みを紹介するケースはほとんど見られなかった。

また、別の観点として、韓国を独立している国として紹介する割合は 35%であったが、ウクライナの場合は 19%しかなかった。これは、ウクライナは独立してまだ 30 年しか経っていないため、まだ一つの国としてではなく、ヨーロッパ圏の一部または旧ソ連の一部として見られているからだと考えられる。このため、「韓国と日本」の関係とは異なり、「ウクライナと日本」は歴史的に共通することがまだ起こっていないと考えられる。同時に、国全



体のイメージがややポジティブだったため、日本との共通点が見られなくても、政治や国際関係などについて「いい点」や「改善できる点」が紹介されていることも明らかとなった。

## 8. 結論と今後の課題

本研究で日本における韓国とウクライナのイメージを分析した結果、距離的な違いや文化的な違い、共通の歴史などが、ある国の人々が他国に対するイメージを築く際に欠かせない要素であることが明らかとなった。日本と距離的に遠いウクライナは、ポジティブに紹介されることが多かったにもかかわらず、国の文化や言語、習慣や料理など異文化理解に貢献できる様子があまり見られなかったため、今後はそのような分野を中心に、日本とウクライナの関係性を深めることが重要ではないかと考える。そのような文化的な側面は、良好なコミュニケーションにも大きな役割を果たすと考えられるため、国同士の関係性の構築には、極めて重要である。だからこそ、他国へのイメージが偏らないように、目に見えやすい政治や国際関係の分野だけでなく、身近な文化的側面への関心と理解が必要ではないだろうか。一方、韓国の場合、本調査で分析した結果ネガティブな捉え方がやや多かったため、日本と比較しながら紹介するという形から離れ、中立的な立場から論じることがコミュニケーションを円滑に行うために必要であると考えられる。しかしながら、日本と韓国は、歴史的背景やそれに関する複雑な関係性も背景として抱えているため、簡単には解決できないのではないかと葛藤も起こり得ると思える。しかし、それでも、お互いの国の文化を「知る」ことだけでなく、「尊重する」「理解するように努力する」ことが重要であるため、感情的に論じるのではなく、中立的な立場からお互いの国を紹介するという姿勢が必要である。

今後の課題としては、分析対象の書籍の数を増やし、分野別に詳細に分析することである。それによって、それぞれの国について、正確かつ全体的なイメージが浮かび上がるのではないかと考えられる。また、研究以外の課題としては、距離的に遠い国同士の関係をもっと緊密にし、お互いの国や文化のことを学びたいという態度をどのように養うかということである。グローバル化が進んでいる現代社会では、どんなに距離が離れた国や地域でも、何らかの形で必ず関わり合っており、自文化を他の文化と比較する機会が増えているため、遠い国との関係も近い国との関係も平等に重要になってきている。従って、隣国だけに限らず、幅広い意味での異文化を受け入れることが、相互理解や平和に繋がるのではないかと考える。以上2点について、今後も検討していきたい。

## 参考文献

麻生川静男(2016)『旅行記・滞在記 500 冊から学ぶ 日本人が知らないアジア人の本質』ウェッジ

- 安達理恵(2008)「日本人の異文化受容態度にみられる傾向 ―地方都市での年代別・国別態度調査より―」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』35, 153-173
- 数多久遠(2021)『ルーシ・コネクション―青年外交官 芦沢行人―』祥伝社文庫
- 大川隆法(2014)『危機の時代の国際政治 ―藤原帰一東大教授守護霊インタビュー―』OR Books
- 小倉紀蔵(2021)『韓国の行動原理』PHP 新書
- 金田正二(2018)『差別された韓国で気づいたふるさと日本』桜の花出版
- 北岡伸一(2019)『世界地図を読み直す―協力と均衡の地政学―』新潮選書
- 木村幹(2022)『韓国愛憎―激変する隣国と私の30年―』中公新書
- 黒川裕次(2002)『物語 ウクライナの歴史―ヨーロッパ最後の大国―』中央公論新社
- 小泉悠(2019)『「帝国」ロシアの地政学―「勢力圏」で読むユーラシア戦略―』東京堂出版
- 佐久間勲(2012)「メディア接触と外国人イメージ」『日本心理学会大会発表論文集』76 (0), セッション ID: 2PMB25
- 佐々木和義(2022)『日本依存から脱却できない韓国』新潮新書
- 佐藤亜紀(2010)『ミノタウロス』講談社文庫
- 治部れんげ(2021)『ジェンダーで見るヒットドラマ ―韓国、アメリカ、欧州、日本―』光文社
- 白石草(2014)『ルポ チェルノブイリ 28年目の子どもたち―ウクライナの取り組みに学ぶ』岩波ブックレット
- 菅沼光弘・藤井厳喜(2015)『世界経済の支配構造が崩壊する―反グローバリズムで日本復活!―』ビジネス社
- 杉森伸吉(2007)『坂西友秀(2005) 近代日本における人種・民族 ステレオタイプと偏見の形成過程』『社会心理学研究』23 (1), 117-118
- 造事務所(2021)『最新データでわかる 日本人・韓国人・中国人』PHP 研究所
- 田辺俊介(2018)「「嫌韓」の担い手と要因―2009年と2013年の2時点のデータ分析による解明―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』63, 67-82
- 手嶋龍一(2021)『鳴かぬのカッコウ』小学館
- 手嶋龍一・佐藤優(2014)『賢者の戦略―生き残るためのインテリジェンス―』新潮社.
- 法務省(2017)「外国人住民調査報告書―訂正版―」  
[https://www.moj.go.jp/JINKEN/stophatespeech\\_chousa.html](https://www.moj.go.jp/JINKEN/stophatespeech_chousa.html) (2022年8月9日最終アクセス)
- 松里公孝(2021)『ポスト社会主義の政治 ―ポーランド、リトアニア、アルメニア、ウクライナモルドヴァの準大統領制』ちくま新書
- 馬淵睦夫(2014)『国難の正体』ビジネス社
- 武藤正敏(2021)『さまよえる韓国人』ワック; New 版

- 村田光二(2006) 「外国人イメージの構造—調査データに基づく考察—」 『一橋大学大学院社会学研究科先端課題研究叢書』 2, 203-233
- 室谷克実(2014) 『ディス・イズ・コリア』 産経セレクト新書
- 室谷克実(2017) 『韓国リスク 半島危機に日本を襲う隣の実態』 産経セレクト新書
- 渡辺利夫(1999) 『現代アジアを読む—テキストでたどる錯綜のアジア—』 PHP 新書
- Hinton, Perry (2017). Implicit stereotypes and the predictive brain: cognition and culture in “biased” person perception Palgrave Communication 3(1). <https://www.nature.com/articles/palcomms201786> (2022 年 8 月 9 日最終アクセス)
- Василенко, Ірина Олександрівна・Vasilenko, Irina・Василенко, Ирина Александровна (2018). Спроба подолання соціокультурних стереотипів у процесі міжкультурної комунікації. <https://ir.kneu.edu.ua:443/handle/2010/25105> (2022 年 8 月 9 日最終アクセス)
- McCracken, Kendra (2021). Barriers, Racism, Discrimination, and Stereotypes Against an Adult Immigrant Pursuing Adult Education: A Case Study, Western Kentucky University. <https://digitalcommons.wku.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=4539&context=theses> (2022 年 8 月 9 日最終アクセス)